

官学協働による「SOSの出し方」に関する 小学生向け絵本の制作（1）

ー絵本制作ワークショップの報告ー

Public-academic collaboration to produce a picture book for elementary school students on “How to SOS” (1) Report on a picture book production workshop

東京家政大学児童学科 武田（六角）洋子
白百合女子大学非常勤講師 細江 幸世
（フリーランス編集者）

1. 子ども¹⁾の自殺をめぐる状況

（1）求められる自殺予防教育

我が国の自殺者数は、全体としては低下傾向にあるが、子どもの自殺者数は高止まりしており、令和4年の小中高生の自殺者数は514人と過去最多となった。

子どもの自殺が増えている現状に対し、事実を重く受け止めた政府は、子どもの自殺対策に関し、関係省庁の知見を結集し、総合的な政策を推進するため、関係省庁連絡会議を開催した。2023年（令和5年）6月、関係省庁（内閣官房、警察庁、こども家庭庁、消防庁、法務省、文部科学省、厚生労働省）で構成される「こどもの自殺対策に関する関係省庁連絡会議」において、こどもの自殺対策緊急強化プランが打ち出された。その中では取り組むべき施策として、①こどもの自殺の要因分析、②自殺予防に資する教育や普及啓発等、③自殺リスクの早期発見、④電話・SNS等を活用した相談体制の整備、⑤自殺予防のための対応、⑥遺されたこどもへの支援の6点が担当省庁とともに示された。上記②では「すべての児童生徒が、“SOSの出し方に関する教育”を年1回受けられるよう全国の教育委員会等に周知するとともに、学校が行うSOSの出し方に関する教育を含む自殺予防教育のモデル構築や啓発資料を国において作成・周知を行う。また、こどもがSOSを出した際に、教員や保護者といった周囲の大人が受け止められることが求められるため、こどものSOSをどのように受け止めるかについて学ぶ機会の設定などの取り組みを確実に進める。」（こども家庭庁、2023）とある。

「SOSの出し方に関する教育」とは、「困難な事態、強い心理的負担を受けた場合等における対処の仕方を身に付ける等のための教育」（文部科学省、2018）と定義されているものである。東京都教育委員会（2018）では、より具体的に、「子供が、現在起きている危機的状況、又は今後起こり得る危機的状況に対応するために、適切な援助希求行動（身近にいる信頼できる大人にSOSを出す）ができるようにすること」、「身近にいる大人がそれを受け止め、支援ができるようにすること」を目的とした教育としている。

（2）小学校における「SOSの出し方に関する教育」

自殺予防教育は、より年少の段階から行われるべきだという問題提起は従来よりなされているものの、小学生への自殺予防教育においては、実際的问题として、「自殺」、「死」を直接取り上げることは、子どもへの侵襲性が高いため、学校現場の抵抗が生じやすいことが予想される。こうした抵抗を踏まえ、阪中（2015）は、小学校でも①命について考える、②自他の援助要請能力を培う（すなわちSOSを出す、他者のSOS受け止める力を培う）という点に焦点化すれば、自殺という言葉を出さずに自殺予防につながる

る学習を行うことができるとし、予防プログラムを試行している（阪中, 2015 p.168 ～ p.177）。鈴木（2019）は小学校教員として、援助要請態度の育成に関する実践について報告している。

SOSを出すことをめぐる心理については、「援助要請（援助希求）」の研究分野での研究成果の蓄積がある（本田, 2015；永井, 2020ほか）。「援助要請（援助希求）：help-seeking」とは、「個人が、問題解決や困難さの軽減のために、他者に助けを求めること（水野, 2021, p.66）」であり、「援助要請先は、友人や家族などのインフォーマルな人から、教師、看護師、カウンセラー、医師などの職業的援助者まで多岐にわたる（水野, 2021, p.66）。」新井・余川（2022）は、小学生向けに援助要請に関する態度やスキルの向上を試みる心理教育プログラムの効果研究を行っている。このような実践報告や効果研究が見られるものの、小学生を対象としたものはまだ少ない。

実践上の大きな課題としては、小学校内で、子どもの自殺に関する教員の問題意識が高く、学校内でそれに向けた予防教育の意義を共有できない限り、多忙な教育現場において1年間で1時間（45分）程度の実施時間を確保することもなかなか難しいという点が挙げられる。また、何とか時間を確保したとしても、一つの教科の中で心の健康に関するプログラムを実施するだけではなかなか効果が上がらないとの指摘もある（阪中, 2015, p.54）。「SOSの出し方に関する教育」として1時間分の時間を捻出して子どもに伝えた内容が、他の授業と関連し、さまざまな学校行事や家庭を含めた日々の暮らしの中でこだましていく必要があるだろう。こだまの創出方法としては、他の科目の内容で関連するものがあるときに触れる他、子どもが援助要請について想起しやすい仕組みを作る必要があるのではないか。また、子どもへの教育のみならず、この教育を実施し、SOSの受け手となる教員への研修や、親への啓発も必要であることが指摘されている（阪中, 2015）。

（3）東京都板橋区の試み

2016年（平成28年）4月に一部改正された自殺対策基本法や、2017年（平成29年7月）に閣議決定された自殺総合対策大綱を踏まえ、児童・生徒の自殺予防対策を更に強化することを目的として、東京都では2017年（平成29年度）に自殺予防教育推進委員会を設置し、学校における指導の在り方等について検討してきた。東京都教育委員会では、「SOSの出し方に関する教育」を推進するための指導資料として、2018年（平成30年）2月に、授業で活用できるDVD教材を作成し、都内全公立学校に配布している。指導案、教材類はホームページにて公開されており、誰でも閲覧できるようになっている。（このホームページは2024年（令和6年）4月に更新されている。）

このように東京都では既に取り組みが始まっているが、1.（1）で述べた昨今の子どもをめぐる自殺の状況、そしてこれに伴う国の強化プランもあり、都内各自治体においても、さらなる取り組みへの工夫が求められていると言えよう。そのような中、筆頭筆者の勤務先のある板橋区で「SOSの出し方に関する絵本」制作の企画が持ち上がった。

2. 官学協働による絵本制作

（1）協働の経緯

本学のある東京都板橋区は、「絵本のまち板橋」のキャッチフレーズで、絵本を柱に様々な事業を展開している。こうしたことから、板橋区の健康生きがい部健康推進課が、自殺予防教育の一環として、小学校高学年児童を対象にした「SOSの出し方に関する絵本」制作を企画し、協働者を募集していた。絵本を用いたさまざまな取り組みを行ってきた区の経験の蓄積が活かされる上、前述のこだま創出の意味からも、また絵本という媒体の持つ特性からも、意義ある企画のように思われたため応募したところ、筆頭筆者が学生とともに参加することになるほか、監修者としてもかかわることになった。本稿の第2筆者は区からの依頼を受け絵本編集者として制作進行を担当することになった。

(2) 絵本というメディアを活用する意義

絵本（もしくは本）には、新たな世界を読者に指し示す「窓」の役割を持ったり、行動へのきっかけとなるような「ドア（扉）」としての役割を持ったりするものがある。山口（2020）は物語や絵本を読むということの効果について、読書療法に関する Pardeck & Pardeck（1984）の著作を引用して次のように述べている。「読書療法において絵本（あるいは物語）を読むということは、同一視と投影（identification and projection）、除反応とカタルシス（abreaction and catharsis）、洞察と統合（insight and integration）の過程を経る（Pardeck&Pardeck,1984）。すなわち読み手は自分とよく似た問題を経験している登場人物に同一視することで、登場人物の思いや人間関係など物語に含まれるさまざまな意味を読み解き、自分の前に立ちだかる問題に対してそれらを当てはめてみる。それにより、何かしらの感情的な解放を経験することとなる。そして、自分の抱える問題への新たな洞察を得、その解決の糸口を見出すのであるが、このことはファシリテーターのいる読書療法ならずとも日常の読書体験の中でも我々が経験する過程であり、登場人物に同一視したり、物語の中に自己の課題を映し出したり、読後にさまざまな感情を味わいつつ、漠然とではあっても自己の抱える問題への解決法を見出したり、あるいは少なくとも解決の可能性についての洞察を得たりする（p.74）。」

小学校5、6年生という十分に活字のみの物語を読むことが可能な年齢の子どもたちに、あえて絵本を提示する理由については、絵本は、文字だけでなくイラストレーションから視覚的にメッセージを届けることができる点を挙げたい。疲れている時や気力がわかない時でも、比較的抵抗感が少なく読める点は、今回のテーマの場合重要だ。さらに、絵本では、イラストレーションによる非言語情報によって、主人公（本書では悩みの主体）だけではなく、そのほかの登場人物（本書では悩みの主体を支える存在や導く存在）にも心を寄せ、その役割の担う行動にも目を向けやすいという特徴がある。したがって、主人公に同一化することが難しい場合でも、読者は、絵本の中に描かれる何かに心を寄せてその物語を理解しようとする。こうした読み方を可能にすることが、幅広い読者を獲得することにつながる絵本の強みであると考えられる。

上述した点に加え、現代では、絵本はエイジレスで多彩なテーマを表現するメディアであると考えられている（松本，2015）。ただ、小学校高学年の児童が絵本に対して、幼い子が読むもの、といった気恥ずかしさを感じることも予想される。したがって、この年齢の子どもに馴染みのあるゲームやキャラクターグッズなどのイラストレーションに近く、手にとりやすい雰囲気をもとに、気持ちがほぐれていくような魅力を持たせることで、絵本に対する心理的な壁を取り除く必要性も、制作においては考慮するとよいだろう。

絵本の場合、読み聞かせという行為を伴うことも多い。読み聞かせを行う際には、読み手である大人は絵本の各登場人物へおのずと思いを寄せるが、その中で、大人も絵本から気づきを得ることで、読み聞かせた子どもとの関係性を変化させやすいということも知られている（石井，2015）。こうした特徴を持つ絵本というメディアを活用することにより、主たる読者対象としては子ども（小学校高学年）を想定しているものの、保護者、教員など大人に対して、子どもへの言葉かけの仕方などが伝わりやすいものとなることも期待できる。

(3) 予想される協働の意義

【学生にとっての意義】

本学児童学科は、卒業後、学生のほとんどが、幼稚園や保育所、認定こども園へ就職する。こうしたことから考えると、小学校高学年児童を想定した絵本作りは、学生の関心にぴったり沿うものではないかもしれない。しかし、以下の4つの理由により、学生にとって教育的意義のある取り組みになるのではないかと予想された。すなわち、①本学児童学科では、児童（18歳未満の子ども）の育ちのプロセスをふま

えて、保育・教育を中心としたさまざまな観点から児童を理解し、多様な背景をもつ子ども一人ひとりの発達を保証することができる高い専門性を備えた保育者を養成することを人材養成・教育研究上の目的としている（本学ホームページ「児童学部」の紹介より）。したがって、保育園、幼稚園等と接続する小学校での子どもの姿を想像することは、子どもに関する理解を深めるとともに、保育者の役割や援助について、俯瞰して考える機会を提供できること。②学生の中には児童養護施設へ就職する者もあり、こうした学生はまさに小学生以上の子どもと多く関わることになること。③援助要請においては、無論年齢による相違点はあるが、共通点も少なくない。そこで、援助要請というテーマについて関心の高い学生をメンバーに募れば、学生の関心にも十分に沿う活動となりうることが予想されたこと。④絵本という保育者にとってなじみの教材が、どのようなプロセスを経て制作されるのかを知ることや、ストーリー作りに参加する体験は、教材研究の観点から有益な体験となりうること。以上4点である。

【板橋区、絵本制作者にとっての意義】

小学生の子どもたちの気持ちに寄り添い、心に響く絵本を作るためには、少し前まで子ども時代を過ごしていた学生の感じ方や意見、体験を教えてもらい、それらをストーリー作りに活かしていくことは、大人にはない観点や見過ごしがちなことに気づかせてもらえるという意義が想定される。

このように、参加者それぞれに互いから学びあうことが期待できる協働となることが予想された。

3. ワークショップ過程

（1）ワークショップ参加者について

ワークショップ（以下WS）は、学生10名、本稿著者2名（大学教員と絵本編集者）、板橋区職員（健康生きがい部健康推進課）で実施した。学生10名（3年生7名、4年生3名）は全員、筆頭筆者が担当する「ゼミナールⅠ」もしくは「ゼミナールⅡ」履修者である。このWSでは、センシティブな内容を扱うため、教員にとって、日ごろやりとりの多いゼミナールの学生が最も目配りしやすい状況にあると考えたため、これらの学生を参加者とすることにした。加えて、これらの学生は、援助要請に関心がある学生たちが多かったため、WSへ参加することで、自身の興味関心を深める体験にもなると予想された。

WSは、2023年9月から2024年1月にかけて、計5回開催され、板橋区からは、学生と最も年齢の近い若手職員1名が毎回オブザーバーとして参加した。初回と最終回には、今回の企画をともに進める3名の区職員（上述の若手職員を含む）も参加した。区職員は毎回使用する資料の印刷の他、記録用の写真撮影を担当し、ワークショップ各回の内容を把握した。

（2）全5回のWS内容

2023年9月から2024年1月にかけて、計5回のWSを実施した。各回の概要は以下のとおりである。

【第1回】

①第1回内容

絵本制作の趣旨説明については、事前に教員より学生に対して実施していた。第1回WS冒頭で、絵本編集者（本稿第2著書）が改めて簡潔に趣旨説明を行った後、リストアップしたところをテーマとした絵本約20冊²⁾を全員で読んだ。こころ、悩みといったことが描かれた絵本群の中から、気に入った絵本を各自選び、選んだ理由を発表した。発表を受け、第2著者が該当絵本の特徴についてコメントを加えた。学生にとっては、各絵本の表現方法の特徴について、作り手の視点から学べ、絵本制作を行うにあたってのウォーミングアップの回となった。

②次回WSに向けた学生の宿題

自身の小学生のころの体験（悲しかったこと、つらかったこと）を思い起こし、そのうち、WSメンバー

に共有してよいものについて、その体験内容とその時の自分の対応をまとめて、教員へ提出する宿題を出した。

子どもの頃の記憶がまだ比較的鮮明に残っている学生ならではの感性を活かす、という点を重視して今回の絵本制作を行うため、この宿題は、個人的な体験を普遍的なストーリーに昇華していくプロセスの起点となる作業にあたる。

③次回WSに向けた筆者らの準備

学生の宿題を集め、誰の体験かわからないよう名前を伏せた上で、エピソードと対応の一覧表を作成し、第2回WSで学生に配布するための資料を作成した。自分の過去のネガティブ感情を伴う体験を想起する宿題であったため、教員から一人ひとりに提出されたものへコメントを返した。必要時には面接を行えるよう準備も整えたが、実際に面接を実施したものはなかった。

【第2回】

①第2回内容

事前に提出されたWSメンバーの小学生時代のエピソードと、その時の対応についてまとめたものを匿名で学生に提示した。小グループに分かれ、各エピソードについて細かな状況を自由に想像してもらい、その後、グループで考えたことを発表してもらった。

②次回に向けた学生の宿題

ストーリー作りの準備のためのワークシートに記入する宿題を出した。

③次回WSに向けた筆者らの準備

話し合いのグループ分けで、第2回WSでは、各グループに4年生と3年生を混ぜたのだが、異学年同士は、これまでにほとんど面識がなかったこともあり、話しにくいようだった。次回WS迄の間、3年生は実習を挟むため、考えてきたことがリセットされてしまう懸念から、次回WSまでの間、タイミングを見て、今回の絵本制作の趣旨や意識して欲しい内容をWSメンバーに配信した。

イラストレーターについて、候補者リストを学生に提示できるよう検討を開始した。

【第3回】

①第3回内容

イラストレーター候補者リストから、候補を絞っていった。男児の方が女児より相談しようと思うことが少なく（永井, 2009）、相談行動をとることも少ない（藤原他, 2016）という事実を共有し、イラストレーター選出にあたっては、絵本の内容にふさわしいと感じる絵という視点のみではなく、男児にも手にとってもらいやすい、という視点を持つ重要性を全員で確認した。

登場人物の設定（人間か、動物か、擬人化した何か）については、学生の間で意見が分かれた。議論の末、今回の絵本の趣旨を表現しやすく、読み手である子どもが同一化しすぎて辛くなりすぎず、抵抗感が少なく手に取ってもらいやすいものとして、人間ではないものとする事になった。

悩んでいた小学生のころの自分にかけてあげたい言葉リスト（第2回宿題）から、いくつか選び、それぞれについて、なぜそのような言葉をかけるに至ったのかについてのシチュエーションを考えた。学生の意見にはなかったが、教員から、臨床上、よく聞かれる子どもの声を紹介し、こうした子どもにどのような声をかけてあげたいかも考えて欲しいと依頼した。孤独と孤立についても考えてみるよう問題提起を行った。

前回の反省を踏まえ、今回は学年別的小グループ編成としたところ、話し合いが充実した回となった。

【第4回】

①第4回内容

学年別のグループに分かれ、絵本の大きさと形状、ストーリーの設定と流れを考えた。参加者の積極的な取り組みにより、徐々に絵本の内容が具体的になってきた。絵本の具体的内容に関する情報管理についてお願いした。その他、イラストレーターの決定を行った。

②次回に向けた宿題

絵本のタイトルとキーワードを次回までに考えてくることを宿題とした。

③次回WSに向けた筆者らの準備

これまで大筋で決まったことを整理して、第2著者（絵本編集者）が、具体的にお話のラフ案を作成した。これについて、筆者らと板橋区で議論と修正を繰り返した。その後、決定したイラストレーターと絵本編集者がやりとりし、第5回WSまでに学生へ提示するお話ラフ案を完成させた。

【第5回】

①第5回WS内容

イラストレーター（まえだよしゆき氏）が来校し、登場人物のイラスト案が提示された。お話ラフ案を学生が通して読んでみて、抜けている点、修正したい点、などの意見を出した。物語を俯瞰的に見て意見を出す学生と、登場人物に自分を投影する読み方をすることによって意見を出す学生の両方がいた。前者は制作者寄りの意見であり、後者は子どもに近い読み方と考えられ、双方から有意義な意見が出た。

②第5回WS後の筆者らの作業

学生の意見を加え、「東京家政大学武田ゼミナール＋まえだよしゆき」が作者となる絵本のラフ案がおむね完成した。この後、あらためて登場人物のセリフの精査を筆者らで行い、まえだ氏が絵を入れ、レイアウト調整、監修者の解説の加筆などの工程を経て完成を目指していくこととなった。

4. 参加学生へのアンケート結果から見た学生にとってのWSの意義

全5回のWS終了後、任意でアンケートへの協力を依頼した。授業の課題としてのアンケート実施ではなかったことと、協力依頼が春休み期間に入ってしまったため、協力者は10名中6名であった。このアンケートでは、アンケート結果の内容を本報告書に含めてよいか問うているが、含めて良いと回答した5名の学生の回答結果のみ報告する。以下の（1）～（8）の問いについて自由記述で回答を求めた。

（1）絵本を協働により制作することについてのWS参加前の興味の程度とその理由

回答者の6割が“大変興味があった”と回答し、4割が“興味があった”と回答した。この理由として、もともと絵本が好きであること、絵を描くことやストーリー作りが好きであること、絵本制作という貴重な体験ができることが挙げられていた。保育者志望の学生にとって、絵本は頻繁に触れる教材であるため、それを制作してみることに興味、関心は高いようだが、それを協働で行うことについては理由として触れられていなかった。学外との協働については、これまでにほとんど経験してこなかったことが予想され、イメージしにくかったものと推察される。

（2）小学生高学年向けに絵本を作ることにについての参加前の興味の程度とその理由

回答者の8割が“大変興味があった”と回答し、2割が“あまり興味がなかった”と回答した。大変興味があったと回答した理由をまとめると、「思春期の入り口である小学校高学年は、さまざまな悩みを経験する時期であり、そうした子どもがSOSを出せない気持ちを深く考えるのは、よい機会であると感じたから」、「絵本というメディアを通してメッセージを伝えることは、助けを必要とする子どもを取りこぼ

さず支援できる一つの方法になる可能性を感じたから」が挙げられていた。このように広く発達を見通し、子どもの援助要請について考えてみることに参加の意義を見出した学生や、子どもを支援する手段としての絵本という取り組みに興味を持った学生がいたことが窺えた。

一方で、あまり興味がなかったと答えた学生の理由としては、「絵本というと乳幼児期から小学校低学年向けというイメージがあり、高学年に向けてどのように作ればよいのかイメージが湧きにくかった」という意見が見られた。

(3) 絵本制作者との協働に関するWS終了後の評価とその理由

回答者の8割が“大変有意義だった”と回答し、2割が“有意義だった”と回答した。そのように回答した理由として、「絵本を制作する側にまわることで、絵本を読む側ではなく制作する立場で絵本を見ることができ、文章や絵の表現に込められた工夫や意図、配慮について学ぶことができ、視野が広がったこと」、「バリアフリーな絵本など、絵本にはさまざまな表現スタイルがあること知り、絵本の世界が広がったこと」、「一つのメッセージを伝えるためには複数の表現方法を取ることが大切であり、いずれかの経路からメッセージが伝わるよう配慮することの大切さを知ったこと」、「絵本制作に関するそれぞれの職の役割について知ることができたこと」が挙げられていた。普段関わるチャンスのない制作者サイドとの協働から得た子どもに何かを伝える際の配慮点についての学びが、印象に残っているようだった。

(4) 一連の絵本制作体験に関するWS終了後の評価とその理由

回答者の6割が“大変有意義だった”と回答し、4割が“有意義だった”と回答した。大変有意義であると回答した理由として、「様々な考えに触れることができたから」、「自分の知らなかったことをたくさん学べ、新しい視点で人を見たり物事を考えたりする機会となったから」、「自分たちの意見や思いをうまく反映させられたから」が挙げられていた。有意義であったと回答した理由については、「絵本制作が丁寧に時間をかけることを実感できたから」、「自分の意見が反映しきれない点もあったが、絵本作りに関わただけでも良い体験だったから」が挙げられていた。

時間的な制約がある中で、限られた紙面に、さまざまなことを考慮、配慮しながらストーリー作りを行うことは、学生にとってやりがいがあったようだ。自分の考えをうまく反映させられたと満足する学生がいた一方で、自分の考えをもう少し反映させたかったとの思いが残る学生もいた。この点については、後日、著者らで協議し、こぼれたであろう視点をストーリーに盛り込む修正を行った。絵本として完成後、ぜひまた学生の意見を聞いてみたい。

(5) 印象に残っていること

「匿名での過去の体験や対処法の共有と、そこから小学生に伝えたいメッセージを考えるプロセス」、「伝えたいメッセージを発するシチュエーションを肉付けしていく話し合い」、「自分たちの話し合った成果がお話として取り込まれ、それが絵と合わさったラフ案を見た時の感動」が印象に残っていることとして挙げられていた。ネガティブな体験の共有については、筆者らも行政サイドも最も気を配り、丁寧に進めることを心がけた点だったが、この共有体験の部分について学生は肯定的にとらえていたようだ。

(6) 援助要請を出せない（出さない）子どもや人について考えたこと

「SOSを出せない（出さない）ことの背後には、多くの理由があることに気づいた」、「SOSを出せない（出さない）人たちの状況や気持ちをイメージすることができた」という意見が見られた。そして、「相談しやすい環境づくりや、相談しやすい働きかけが大事であると同時に、困っている状況にまわりが気づけるようにする大切さを感じた」と考えた学生もいた。「大人からすると些細に思えることも、子どもか

らすると人生の一大事ということを感じた」と、自らの子ども時代を振り返って得られた実感もあったようだ。同時に、「子どもの異変に気付いた保護者は、子どもにどこまで聞いてもよいのか対応が難しいと感じるのではないかと思った」と、大人側の視点にも立ち、子どものSOSを受けとった大人への援助の必要性に気づいた学生の意見も見られた。「相談できない人に、してみようかと思ってもらうきっかけとして、絵本というツールは有効ではないかと改めて思った」と考えたものもいた。

(7) あなた自身の援助要請について考えたこと

「自分で解決するときと、誰かに頼るときを組み合わせながら、自分の悩みや不安と向き合っていく」というように、適度な援助要請を心がけて行きたいという意見が見られた。そして、「適度」の意味するところは、「自分らしく折り合いをつけたい」ということであり、援助要請にも個性があってよいとの考えを述べている学生がいた。「困ったときの解決方法はいろいろあることがわかったので、いろんな方法を試して、不安をためないようにしたい」、「一人で落ち着くという方法もありなんだと思った」など、困ったときの対処方法が広がったり、今までの自分の対処方法を確認したりといった意見も見られた。「自分は、不安になったとき、誰かにすぐ話してしまうので、あまり思いつめないようだ」と自分の援助要請傾向について分析するものもあり、それぞれに自分の援助要請について振り返っていた。

援助要請というテーマについて深く考え、話し合った経験は、子ども理解のみならず、自己理解を深めるきっかけにもなったようだ。このことは、SOSを受け止める側になることの多い対人援助職に就くものとして、意義あることだと思われる。

(8) その他感想 ((1)～(7) で言及した内容以外のこと)

保育者としての学びを挙げる意見が多かった。具体的には、「援助要請について、保育の場面でも考えてみたくなった」、「今回、小学生向けにかける言葉についてたくさん考えたが、保育の場でも子どもの気持ちを考え言葉かけをすることは信頼関係を築く上でも大切なので、とても学びになることが多かった」といったものである。今回のWSで、保育園・幼稚園等の先にある小学校の子どもが、困難なことに直面した時の心やその対応について深く考えた体験を通じて、「それでは、保育の場ではこの学びをどのように生かしていこうか」という思考に至ったことを頼もしく感じた。「絵本の楽しみ方が広がった」という意見も見られ、このことは保育者として、豊かな絵本体験を子どもに提供することに資するのではないかと考えられる。

今回、絵本制作者側に回ることで、絵本のもつ奥深さや力を改めて感じるとともに、一つの作品を作る(つまり、さまざまな感じ方、受け止め方をする大勢にメッセージを伝える)にあたり、非常に多くのことを配慮する必要があることも大きな学びとなったようだ。

ただし、3. で述べたアンケート結果は、アンケート未回答者の意見を反映できていないため、回答の解釈は限定的なものとなるだろう。

5. まとめ

本稿では、官学協働で、「SOSの出し方に関する絵本」を制作するに至った経緯と、制作のWSの模様並びに参加した学生の感想を報告した³⁾。絵本完成後も板橋区と連携し、学生とともにさまざまな活動を展開予定である。その模様については改めて報告する。

注

1) 本稿では、「子ども」の表記を用いることを基本とするが、引用文献において、「こども」あるいは「子供」と表記されている場合は、原典表記のままとしている。

- 2) 『ひみつのビクビク』（フランチェスカ・サンナ作、なかがわちひろ訳、あかつき教育図書）、『あなたのこころは空のよう』（B・バラード作、ローラ・カーリン絵、広松由希子訳、BL出版）など。なお、WSで使用した絵本のリストは、今回制作した絵本巻末に掲載予定である。
- 3) 本稿作成においては、板橋区健康生きがい部健康推進課にもご協力いただいた。

参考文献

- ・新井雅・余川茉祐（2022）. 小学生に対する援助要請に焦点を当てた心理教育プログラムの効果研究－自殺予防教育への示唆－. 教育心理学研究, 70, 389-403.
- ・藤原健志・村上達也・西谷（鈴木）美紀・櫻井茂男（2016）. 児童用援助要請行動尺度の作成 教育相談研究, 53, 1-12.
- ・本田真大（2015）. 援助要請のカウンセリング「助けて」と言えない子どもと親への援助. 金子書房.
- ・石井光恵編（2015）. 絵本学講座2 絵本の受容. 朝倉書店.
- ・こども家庭庁支援局総務課自殺対策室（2023）. こどもの自殺対策緊急強化プラン. （子どもの自殺対策に関する関係省庁連絡会議）
- ・松本猛編（2015）. 絵本学講座3 絵本と社会. 朝倉書店.
- ・水野治久（2021）. 援助要請 help-seeking. 子安増生・丹野義彦・箱田裕司（監修）. 有斐閣現代心理学辞典. 有斐閣. p.66.
- ・文部科学省（2018）. 平成30年1月23日 児童生徒の自殺予防に向けた困難な事態、強い心理的負担を受けた場合などにおける対処の仕方を身につける等のための教育の推進について（通知）
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1408025.htm 2024年8月1日取得.（公開日2018年1月23日）
- ・永井智（2009）. 小学生における援助要請意図－学校満足度、悩みの経験、抑うつとの関係 学校心理学研究, 9（1）, 17-24.
- ・永井智（2020）. 臨床心理学領域の援助要請研究における現状と課題－援助要請研究における3つの問いを中心に－. 心理学評論, 63（4）, 477-496.
- ・Pardeck, Jean A. & Pardeck, John T. (1984). Young people with problems: A guide to Bibliotherapy. Greenwood press.
- ・阪中順子（2015）. 学校現場から発信する子どもの自殺予防ガイドブック－いのちの危機と向き合って－. 金剛出版.
- ・東京都教育委員会（2024）. 「SOSの出し方に関する教育」を推進するための資料について.
https://www.kyoiku.metro.tokyo.lg.jp/school/content/sos_sing.html 2024年8月1日取得.（公開日2018年4月2日、最終更新日2024年4月2日）
- ・山口雅史（2020）. 絵本の発達心理学的分析（1）－『かいじゅうたちのいるところ』を素材として－. 人間関係学研究, 18, 73-82.